
何が為に人を殺す

カウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何が為に人を殺す

【Nコード】

N5239B

【作者名】

カウ

【あらすじ】

とある研究所の所長が殺害された。容疑者はたったの三人。しかし、この三人のアリバイはどうみても崩しようないほど完璧。作者から読者へ送る推理パズル。あなたは真実にたどりつけるか？

ブローグ

3月1日午前7時30分

居間でいつものように妻と朝食をとる。別に何か不満があるわけではない。だが、このところ何か違和感を感じるのは事実だ。それがどういったものであるか、自分でもうまくは言えないのだが…

午前8時10分

「今日は遅くなると思う。」

そう妻に告げ、私はすぐに家を出た。

午前9時43分

研究所に着いた。私がこの小さな研究所で働き始めたのは今から3年前。とある有力企業の施設であるこの研究所は、小さいが設備はしっかりとしており、これまでに数々の成果を残してきた。私は今では今ではここの所長だ。

午前9時45分

「所長、おはようございます。」

「おはようございます。」

「うむ。おはよう。」

研究室にはすでに滝本副所長と研究員の井上が来ていた。

「所長。いきなりですが、実験室の利用許可をいただけませんか？是非確認したいことがあります。」

「ああ、分かった。」

午前9時50分

井上を実験室に入れ、私は研究室でデータ整理を始めた。研究室と言っても人数分のデスクにパソコン、関連書類、以前功績を認め

られ、本社から貰った賞状とトロフィー、そして暇つぶしにテレビが置いてある程度のものだ。

午前11時1分

突然妻がやってきた。

「あなた。お弁当忘れてたわよ。」

「おお、そうか。すまないな。」

「いつもの愛妻弁当ですか。いいですね。私もちょっと早いですが、昼に行ってきます。」

滝本が出ていき、部屋には妻と二人きり。辺りをうろつろと見て回っている妻を見て、私はまた何か違和感を感じた。弁当を届けにきただけにしては服装が少々派手に思える。

「それじゃあ、頑張ってくださいね。」

妻は笑顔で部屋を後にした。

12時10分

テレビが何やら騒がしい。ニュースの内容からすると、どうやら酷い事故があったらしい。

その時、不意に頭に強い衝撃を受け、私は床に倒れ込んだ。辺り一面に机の上の書類が舞散った。振り向き見上げると、見慣れた人物がトロフィーを握りしめて立っている。奴は再び私の頭を殴りつける。私は動けなかった。奴が部屋から出ていく足音がする。足音を認識しているのだから、まだ死んではいないのだろ。私は目の前に転がっていたボールペンを持ち、書類にひたすら書き付けた。

そして、目の前が真っ暗になった。

捜査会議

埼玉県警。○研究所殺人事件捜査本部

「各員、捜査結果の報告を。」

「はい。被害者は今田竹幸、43歳男性。現場となった研究所の所長です。死亡推定時刻は午後12時前後。現場に残されていたトロフィーが凶器であり、それで頭部を強打されたものと思われます。」

「現場の状況は？」

「遺体が発見されたのは、研究室です。辺り一面に書類が撒き散らしてあり、遺体の手元に落ちていた用紙にh e p l a y H B rという書き込みが確認されました。被害者によるダイニングメッセージと考えられます。」

「彼は臭化水素を演じる？どういう意味だ。まあいい。次。」

「第一発見者は警備員畑中常吉50歳。特殊実験室にいた井上一透研究員から、研究室にいるはずの所長と連絡がとれないので確認するよう頼まれ、様子を見に行ったところ遺体を発見したということです。」

「なぜ、その研究員は自分で様子を見に行かなかったんだ。」

「それが、その実験室は特殊な構造をしていまして、入り口は一カ所。しかも所長専用のカードキーを使い、部屋の外側からしか鍵を開けられないんです。そのカードキーは現場となった研究室の所長のデスクの引き出しの中に入れており、それを使って他ならぬ私自身が実験室内の井上研究員を解放しました。」

「アリバイは完璧か。他の容疑者は？」

「その日、研究所にいたのは被害者、警備員、井上氏の他に二人。副所長の滝本浩二46歳男性と被害者の妻、香織29歳です。」

「そのどちらかが犯人ということか。」

「いえ、実は妻の香織氏は犯行時間に浮気相手と密会していたと供述しており、利用したホテルから現場まで急いでも片道30分。フロントの証言や防犯ビデオの映像から、その供述は正しいものかと…」

「なら話は簡単だ。副所長しか犯人はいないだろ。滝本氏は今どこでどうしてるんだ？」

「それが…入院してるんです。」

「何？」

「事件当日発生した踏切内で電車がトラックと衝突した大事故。あの電車に乗ってたんですよ。滝本氏が。事故発生時刻は11時30分。その3時間後に救助されてるんです。」

「何！？それでは、皆アリバイが成立しているのか？」

今田香織の供述

ある昼下がり、私は車を走らせていた。先ほどの捜査会議での疑問を解決するために。

現場となった研究所の入り口は二カ所。1つは正面玄関、カードキーを持った関係者のみ出入りできる。事件当日その入り口を使ったのは、被害者の他には2名。副所長の滝本氏と研究員の井上氏だけだ。

もう1つの入り口は警備員が常に配置されている。ここを通って中に入ったのは被害者の妻、香織氏。明らかに容疑者はこの3人だ。しかし、ある者はホテルの一室。ある者は特殊実験室。またある者は事故を起こした電車。それぞれ隔離された状態で犯行時間を過ごしている。

「いわば、逆密室殺人といったところか。」

捜査会議は完全に行き詰まってしまった。警備員による犯行も考えられたが、この研究所の警備員は馴れ合いを防ぐために毎月1日に交代していた。面識もない人間を殺すとは考えにくい。

しかし、捜査会議の内容に私は何か引つかかるものを感じた。アリバイを崩せるかもしれない。私は聞き込みをするために、急いで車を走らせた。

今田邸に着き、妻の香織氏がいることを確認した私は、中に入り聞き込みを開始した。

「埼玉県警の三木と申します。お話を伺ってもよろしいでしょうか？」

「ええ、何でもいいですよ。私は主人を殺してなんかいませんから。」

彼女は真っ直ぐとこちらを見つめてくる。

「それでは、ご主人はどのような方でしたか？」

「とても賢く立派な人でした。天才とはああいう人のことをいうなど思います。私のような女には、とても釣り合わなかったんです。」

「それで、浮気を。そうですか。それでは、事件当日の午後１時頃はどうしていらっやいましたか？」

「他の方にもお話したように、そのころホテルにチェックインしました。主人が亡くなったと知ったのも、お恥ずかしい話ですがベットの中です。」

「そうですか。分かりました。どうもご協力ありがとうございました。」

フロントの記録によれば、チェックインの時刻は午後１時８分。証言とも矛盾しない。私は次の目的地へと向かった。

滝本浩二の供述

埼玉総合病院、私は入院している滝本氏を訪ねた。

「滝本さん、私埼玉県警の三木と申します。お話を伺ってもよろしいでしょうか？」

「まだ、頭がふらふらするので、手短に、お願いします。」

頭に包帯を巻き、骨折しているのか右足を吊っている。

「それでは、事故の状況がどういったものだったのか、教えていただけますか？」

「どういう状況って……とにかく凄い衝撃で、頭打って、あとは救助の人が車内から引きずり出してくれるまで、気を失ってたよ。」

男は思い出すのも嫌そうに語っている。

「それでは、研究所のことですが、特殊実験室について教えていただけますか。」

「ああ、あそこは本当に特殊だね。所長のカードキーが無けりや誰も入れないし、うっかりそのカードキー持ったまま中に入ってドアを閉めたら、本社に連絡して技術者呼ばないとドアを開けられない。元々は実験に重大な問題が発生したら完全封鎖できるようにするためなんですがね。」

「分かりました。ご協力ありがとうございます。」

次に井上氏を訪ね、聞き込みをすることはなかった。どの刑事が訪ねても犯行当日のことは次のように供述している。

「その日は、やらなければならない実験があったので、朝の9時頃には所長に特殊実験室の鍵を開けてもらいました。そして、私は中に入っつてずっと実験をしていたんです。そろそろ腹がへったから、食事を取ろうと思い、所長に連絡したけれど反応がない。そこで警備員に連絡したらこの騒ぎです。捜査に来てカードキーを見つけてくれた刑事さんに鍵を開けてもらつまで、私はずっと実験室の中に

いたんです。」

確かにそれしか言うことはないだろうと私も思う。井上氏に聞き込みをしても新たな供述は得られないと判断した。

私はここまでの3人の証言をもう一度思い返し、整理してみた。私の頭におぼろげながら浮かんでいた考えが段々と固まってきた。そして、私はある所へと向かった。

数時間後、私の推測通り、目的地であるものを手に入れたのだ。私は急いで本部に連絡を取った。

「警部、報告があります。容疑者を1名に絞りこむことができました。」

「本当か!？」

「はい。残念ながら現段階で物証はありませんが、容疑者3名の中で犯行が可能だった者が1人だけ存在します。犯行が可能だった唯一の人物、それは……」

滝本浩二の供述（後書き）

以上で本編は終了です。皆さんからの意見、ご感想をお待ちしております。なお、現在正解者は二名です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5239b/>

何が為に人を殺す

2010年10月10日20時41分発行